

黒人研究の会会報

*Japan Black Studies Association Newsletter No.73 (December
20, 2011)*

第73号 2011年12月20日

例会発表要旨

5月例会 2011年5月28日 立命館大学

「大会シンポジウム〈グローバル化のなかの黒人研究〉について
(その目的や問題提起)」

加藤 恒彦

1. 問題意識

- ① アメリカ、イギリス、日本、台湾でのBlack Studiesの最近の動向を知るというのみならず、「Globalizationのなかでの」という観点に意味を持たせて現状を歴史的に理解するとした場合、どのような展望が開けるのか？

② 発表予定者の発表予定内容を具体的に吟味し、①の枠組みとの関係で位置付ける。

2. 広義のグローバル化の歴史的時代区分と時代ごとの特徴、発表の位置づけ

- ① Globalizationの第一段階は西洋による奴隷貿易と植民地化の時代。言い換えれば帝国の形成(西洋社会によるアジア・アフリカ・ラテンアメリカの植民地体制の構築の時代) Chandler氏は、Du Boisが「20世紀の最大の問題は、カラー・ラインの問題である」といったときに、アメリカにおける黒人への人種差別について語りつつも、同時にイギリスやフランスによる帝国の形成(アジア・アフリカ植民地化の進展)、すなわち有色人種にたいする世界規模での支配の進行を視野に入れていたと指摘している。興味深いのはDu Boisと親交のあったMax Weberが「20世紀の最大の問題はカラー・ラインの問題である」という手紙を読んで「そうだ、いたるところで」と同意していることである。明らかにWeberは「世界中で」進行している植民地主義を「カラー・ライン」の形成と重ね合わせて理解していたのである。したがって「カラー・ラインは20世紀最大の問題である」といったときDu Boisはアメリカの黒人への差別との闘いのみならず、人種主義に支えられた西洋植民地主義との闘いと独立も視野に入れていたと見ることができるのである。事実、第二次世界大戦に到る過程はカラー・ラインに基づく植民地体制打破、独立に向けての動きが世界化してゆき、第二次大戦後の独立への流れへとつながる時代でもあった。

② 第二次大戦後

第二次大戦後の世界は、帝国の崩壊にからんで globalization of decolonization(脱植民地化の世界化)が起こる。重要なのは、アメリカとイギリスの場合、その動向が異なった展開を生み出しつつ、現在新たな段階に至っており、大会ではそれぞれの国での文学的展開について研究報告がある。

Edwidge Danticat, Eight Days (2010)を読む

山本 伸

これは文／エドウィージ・ダンティカ、絵／アリックス・デリノアによる絵本である。テーマは2010年1月12日発生のハイチ大地震。ハイチは人口の約半分が15歳以下であり、当然ながらそれに比例して子どもたちの犠牲も多数にのぼったが、助かった子どもたちや直接は地震を体験しなかったハイチ系移民の子どもたちの精神的な打撃は想像に余りある。災害への恐怖と死への悲しみは子どもたちの心に深い傷を残したにちがいない。ダンティカは我が子を安心させるためにした子ども救出の実話をきっかけに、この絵本の出版を思いついたという。まえがきには次のようにある。

ハイチの子どもたちに地震以前のハイチにいかに素晴らしい生活があったかを伝えると同時に、将来に向かって何が出来るのかという可能性を探ってほしい。

物語はその大部分を主人公の少年が「遊ぶ」場面に終始する。ガレキの下に閉じ込められているはずの少年が、である。これは一種のマジカルリアリズム的な異化効果を読者にもたらす。言い換えれば、この時点で物語は少年の空想の世界へと入っていく。そして、その空想のなかで再現されるハイチは、美しく、優しく、楽しく、嬉しい。迫りくる死の恐怖と引き換えに、少年はそれまでの短い生涯で経験した大好きなハイチを精一杯心のなかに描いたのだ。

ダンティカの文学の大きなテーマのひとつは「記憶」であるが、まさに少年の記憶のなかで培われたハイチの人びとや社会、文化への愛しみが絵本全体に満ち溢れている。実直な少年の目を通して、苦を語らず、教訓も示さず、ただひたすらにハイチへの愛を描いたダンティカのハイチ系作家としてのひたむきさが強く感じられる作品である。

9月例会 2011年9月17日 キャンパスプラザ京都

ハニフ・クレイシの『ブラック・アルバム』における多文化主義

北島 義信

ハニフ・クレイシ(1954 -)は、短編『狂信者、わが息子』(1994)、長編『ブラック・アルバム』(1995)を通じて、「イスラーム原理主義」を生み出したのは、イギリスにおける社会的・心理的差別であることを明らかにした。南アジアからの移民「第二世代」は「世俗社会」であるイギリスで暮らす中で、多くの「第一世代」のように、「同化」してもイギリス人には、なれないことを知る。クレイシはその根底に、他者を排除する「西洋中心」のイデオロギーが存在していることを厳しく批判している。この現実が南アジア移民「二世」の若者をイスラームへと導くのである。しかしながら、彼らの日常生活には、南アジア地域におけるようなイスラーム文化が存在しないため、そのイスラームは「原理主義」化して、「西洋中心主義」の裏返しとなることも生じ得る。

クレイシは「イスラーム原理主義」と「西洋中心主義」を乗り越え、多文化共生社会の実現に向かう道は、固定的な視点に固守することなく、他者を認め、相互交流によって自分をも問う立場こそが、南アジア移民「二世」にも、イギリス白人にも必要であることを述べている。『ブラック・アルバム』における主人公シャヒードと白人女性教員との愛には、このような多文化共生の可能性が暗示されている。

10月例会 2011年10月15日 キャンパスプラザ京都

The Significance of More Than Just Race

加藤 恒彦

More Than Just Race (2009)はアメリカ黒人の現状についての画期的な著作The Declining Significance of Race (1978)のアップデート版であり、その間のアメリカ社会の構造的変化を押さえながら、また新たな研究や論争について

も組み込み、主にイナー・シティに取り残された黒人貧困層の状況と解決の方向についての提言を含んだ著作である。

78年の著作は、黒人がもはや単一の集団ではなく、成功しアメリカ主流社会の一部となった黒人とイナー・シティに取り残された貧しい黒人に分かれているという事実を明らかにした(黒人の二極化)。

今回の新作はその後の現在に至る展開、主にイナー・シティの黒人男性の貧困と失業の実態、黒人女性の未婚と母子家庭の脅威的増大に焦点を当てながら、その背景にある社会・経済的構造的要因とゲットー独自の文化的要因の両面からアプローチしている。

その特徴は①構造的要因が最大の原因であることをしばしば強調しつつ、②アメリカの個人主義的伝統・文化やその現代的変容の影響を受けつつ、ゲットー内部において独自の展開を見せていること、③そして独自の文化的諸傾向が深刻な貧困・失業状況を支える否定的役割を果たしていること、④しかし、ゲットー内部の黒人のなかには否定的傾向に与せず個人的イニシャチブを強調する傾向もあること、⑤何よりも、否定的なゲットーの文化が構造的要因に対する生き残り戦略として生まれており、かつ失業と貧困に最も直接に影響を与えるのは景気の動向のように構造的要因の変化であることを数字を挙げて説明していること、⑥そして最後に、そうした現実の諸問題の解決の方向を構造的要因と文化的要因の双方から見出すことが必要であるとしている、等の点にある。

11月例会 2011年11月26日 キャンパスプラザ京都

国家・人種の境界を越えた比較研究とその意義 — 1920年から1945年までの大阪
朝鮮人コミュニティとシカゴ黒人コミュニティの経験を中心にして —

堀田 千里

今回の発表では大阪の朝鮮人コミュニティとシカゴの黒人コミュニティの1920年から1945年までの経済的・社会的・文化的 そして人種的経験を比較

検討することにより、地理的にも離れ歴史的にも全く異なる(例えば、奴隷制と植民地支配)二つのマイノリティ・コミュニティが、いかに、なぜ似通った経験をもったかを明らかにする。それを通じて、人種・民族関係を歴史的に理解することに役立てると同時に、世界のマイノリティと周縁化された人々の歴史的経験の理解を助けるための理論的枠組みを提示することを目指す。本発表を通じて、国家や人種・民族の境界を超えるこのプロジェクトの重要性と今日的意義を深く掘り下げる。

まず比較研究の正当性を示すために、「セカンド・メトロポリス」と呼ばれる大阪とシカゴの際立った共通点を明らかにすると同時に、朝鮮人と黒人を選択した理由を明示する。また、人種／人種主義／人種化という言葉の定義をおこない、人種とエスニシティの違い、そして日本の人種主義と西洋の人種主義の違いを明らかにする。それらをふまえ、本論に入る前に、それぞれのコミュニティの形成過程を手短かに紹介し、この発表の中心的な課題である、朝鮮人、アメリカ黒人に対する偏見と差別の実態を明らかにし人種主義を産出する社会構造を検討する。その中で、彼らの人種的経験の重要な差異や類似点をあきらかにし、それらがはらむ問題点を摘出する。具体的には、住居隔離と人種化との関連や、肌の色の違いと差別の度合いとの関連等を取りあげる。

またこの発表では、比較研究を通じて明らかになってくる理論的枠組みを提供する。たとえば、消費主義と資本主義の関連を討論することで、不動産価値(property value)そして住宅所有の意味を問いかけると同時に、住宅隔離と階級、人種、ジェンダーとの深い繋がりを明らかにする。さらに、近代国家と人種の関係では、「良質な人口」を作り出すという国家の願望は、世界的にひろがった科学的人種主義とりわけ、優生学思想とむすびつき、それが、従来からある差別思想と融合したということを明らかにする。加えて、このグローバルな視座をもった比較研究は、移民人口が増加する中で現在生じている人種間の軋轢を解決する手段を見いだす上で有効ではないかと考える。

それと同時に、この発表では、朝鮮人・黒人コミュニティの負の経験だけでなく、差別に対抗する中で、構築された、人種・民族アイデンティティやコミュニティの多様性を示し、従来犠牲者としてのみ、描かれてきた彼・彼女らを、歴史とコミュニティの主人公として位置づけ、逞しく活力のあるコミュニティ像の明示を目指した。最後に国と人種をこえたこの比較研究は、大阪の朝鮮人とシカゴの黒人のコミュニティの経験を比較するだけにとどまらず、それらの経験の

グローバルな繋がりを見いだすことで、この発表の重要性と今日的意義を明らかにし、かつ比較歴史学研究に於ける「実証」と「理論」の両立の大切さを示す。地理的にも、時代的にも限られた二つのマイノリティ コミュニティの経験の比較ではあるが、この発表によって、マイノリティ研究に新しい境地を開くことに少しでも貢献したい。 (広島経済大学非常勤講師)

会員からの投稿

木内徹・福島昇・西本あづさ監訳

『世界文学史はいかにして可能か』(成美堂、2011年)を刊行して

木内 徹

本書は、『ニュー・リテラリー・ヒストリー』(New Literary History 39[3] [Summer 2008])「グローバル時代における文学史」特集号所収の17論文のうち、特に重要と思われるものを11点選んで翻訳したものである。本誌『ニュー・リテラリー・ヒストリー』は、ジョンズホプキンス大学から出版されている、最新の文学理論を専門とする米国有数の季刊研究誌である。本誌は、ヴァージニア大学英文科教授リタ・フェルスキー氏を編集長としており、フェルスキー氏は本誌創刊40周年を境目に、編集長として、欧米諸国ではすでに定評のある本誌を、アジア諸国での知名度をさらに上げようと、中国、韓国、ポーランド、そして日本で本誌の翻訳刊行を計画した。

こうして、日本で同誌の論文を翻訳刊行する企画がたてられた。そのため、本誌編集長フェルスキー氏は、私たち監訳者の一人である木内徹と西本あづさ氏に本誌の翻訳を依頼してきた。本誌所収の各論文は、この「グローバル時代」に「文学史」を考えるものであるが、かねてより文学史の世界展開、つまり世界文学史の記述は様々な角度から挑戦されてきた。しかし、今日ほど世界が緊密に関連しあい、IT革命によって瞬時に情報が飛び交う時代はなかった。

そのようなグローバルな時代に文学史を考えると、必然的に「世界文学史はいかにして可能か」という問いに至ることになり、かくして、ここに展開される11点の各論文は「グローバル時代における文学史」、すなわち、「世界文学史はいかにして可能か」を気鋭の研究者たちがそれぞれの立場から議論するのである。

訳出された論文は、フレドリック・ジェイムソン著『『新しさ』の終焉とそれ以降の新しい文学史』(細谷等訳)、ヴァルター・F・ファイト著「グローバル化と文学史、あるいは比較文学史再考——グローバルに」(福島昇訳)、アンダシュ・ペッタション「トランスカルチュラル文学史——世界文学に関する窮屈な考えを越えて」(長畑明利)、デーヴィッド・ダムロッシュ「世界文学史へ向けて」(三石庸子訳)、カリン・ボール「文学史のための原初の自然の逆襲と、他の擬人化された投影」(森あおい・宮本敬子共訳)、レイ・チョウ著「翻訳者は裏切り者／翻訳者は追悼者——あるいは異文化間の等価性を夢みて」(西本あづさ訳)、エミリー・アプター著「翻訳不可能なもの——世界システム」(中地幸訳)、ニルヴァーナ・タノウキ著「世界文学の規模」(坂下史子訳)、ウィ・チャー・ディモック著「古代エジプト語の代名詞——抒情詩、小説、そして『死者の暦』」(横田由理訳)、フランシス・ファーガソン著「地球(プラネット)文学史——テキストの位置」(木内徹訳)、マーク・ポスター著「グローバル・メディアと文化」(山本伸訳)である。

その基本になる理論は、世界中の文学をパリをその首都とする広大な文学の世界空間として記述しようと試みたパスカル・カザノヴァの『世界文学空間』と、フランコ・モレッティの『地図、樹木、系図』に提起された「遠読」(distant reading)という理論を使って、精読によって明らかになった一つの作品と綿密に直接関わることよりも、社会学的な認識の方に正しく結びつけられた知識の方が、それだけで単位と見なされた作品の理解に貢献することを明らかにしようとするのである。

歴史とフィクションのあいだ — 『ザ・ヘルプ』をめぐって

坂下 史子

9月に渡米した折、話題の映画『ザ・ヘルプ』(“The Help”)を観た。話題というよりは、学界で議論を巻き起こしていた映画といった方が正しいかもしれない。

原作はキャスリン・ストケットによる同名小説。『ニューヨーク・タイムズ』紙の書籍売上ベスト10に100週以上ランクインしていたというミリオンセラーの映画化である。小説のことは耳にしていたものの映画の方はフォローしていなかった私が、映画(と小説)にまつわる議論を最初に知ることになったのは、所属する黒人女性史家学会(Association of Black Women Historians、以下ABWH)のメーリングリストを通じてである。映画の全米公開からわずか2日後の8月12日、ABWHは会員宛てに「『ザ・ヘルプ』に対する返答」と題するメールを送付してきた。そこには、数人の会員が中心となって作成した「『ザ・ヘルプ』のファンへの公開声明文」という文書が添付されていた。ABWHはこの声明文の中で、小説版と映画版双方の『ザ・ヘルプ』に対して、歴史的見地から厳しい批判を展開している。(この声明文を受けて、H-NETのAfrican American Studiesネットワークでも、8月中旬から下旬にかけて議論が盛んに交わされた。)

作品名の「ヘルプ」とは黒人家政婦のことである。舞台は1960年代前半のミシシッピ州ジャクソン。大学卒業後帰郷し、地元の新聞社で仕事を果たした白人女性スキーターは、家事に関するコラムを任されたことから、専業主婦の友人宅で働く黒人家政婦エイビリーンにインタビューを始める。自身も黒人家政婦に育てられたスキーターは、エイビリーンの話を聞くうちに、育ての母である彼女達のことを自分達は全く知らないことに気づく。また、家政婦の待遇の酷さを知ったこともあり、家政婦の体験や本音をまとめて本にするという企画を思いつくと、エイビリーンらに協力を求める。エイビリーンと家政婦仲間のミニーは、スキーターの無邪気な申し出のリスクを重々承知しながらも、秘密裏にインタビューを続けていく。のちには他の家政婦も加わり、匿名のインタビュー集『ザ・ヘルプ』が出版される。こうして、スキーターと黒人家政婦の勇気ある行動によって、南部社会の現状への異議申し立てが行われるのである。

ABWHの声明文は、小説と映画が「人種的不平等に打ち勝つ進歩的な物語」として宣伝されているのとは裏腹に、この作品が実際には「黒人家政婦の様々な経験を歪曲し、無視し、矮小化している」と主張する。そもそも、黒人家政婦という存在自体が当時の構造的差別を露呈していたわけで、人種隔離制度下で黒人女性の雇用機会が限定されていたからこそ、1960年代当時、ABWHによれば、南部で働く黒人女性の9割近くが白人家庭の家政婦業に従事していたのである。しかしながら、こうした点には触れないまま、『ザ・ヘルプ』に登場する黒人家政婦の表象は「期待はずれにもマミー像を復活」させている、と声明

文は指摘する。性的魅力がなく主人に忠実で、白人の世話を満足するマミーのステレオタイプによって、アメリカ主流社会は、黒人女性を低賃金・重労働で性的搾取の横行する仕事に縛りつけてきた構造的な人種差別の問題を長らく看過してきたわけだが、『ザ・ヘルプ』もまた、こうしたマミー像の復活によって、「古き良き時代」へのノスタルジアをかきたてることに終始しているというのである。

声明文はさらに、『ザ・ヘルプ』が黒人の話法と文化を誤って伝えている点も問題視している。例えば、作品では、南部の適切な方言の代わりに、子供じみて大げさに脚色された「黒人」訛りが採用され(この点もマミー像を強化していると思われる)、黒人コミュニティ、とりわけ黒人家庭は、機能不全もしくは男性不在のものとして描写されている。また、人種隔離制度という歴史背景が十分に扱われていないこと、そのためミシシッピ州の公民権運動についてもほとんど触れられていないことにも、ABWHは懸念を示している。たしかに、ワシントン大行進が計画進行中であることやNAACPミシシッピ州支部代表のメドガー・エヴァーズ殺害のニュースは手短に紹介されるものの、当時の人種隔離制度やそれに対する抵抗としての公民権運動は、個人レベルの行為としてしか語られていない。例えば、作品の中ではKKKや白人市民会議は言及されず、人種差別主義者として登場するのはスキーターの友人達のみである。しかし、若く魅力的で社交的だが気まぐれな白人女主人像によって、人種の不正義というより大きな問題は、単なる個人的な意地悪行為に矮小化されている。したがって、黒人家政婦が白人家庭の屋内トイレ使用を禁じられていたという物語の中心のエピソードも、人種隔離制度の一例というよりは、白人女主人の個人的な悪意によるものといった印象を与え、そのトイレを使用するミニーの抵抗も、コメディの文脈で面白おかしく語られて終わっている。

声明文の最後で、ABWHは、この作品が娯楽のために黒人女性の人生から歴史的正確さを剥奪していることは許しがたい、と断罪している。というのも、ABWHにしてみれば、『ザ・ヘルプ』は結局のところ、白人家庭で彼らを支えてきた黒人家政婦についての物語ではなく、黒人女性の人生にまつわる神話を利用して自身の人生の意味を見出す白人女性スキーターの成長物語にすぎないからである。同様のテーマ(黒人家政婦の苦難、家政婦と白人女性の「友情」、白人女性的人間的成長など)を扱った映画として、1990年公開の『ロング・ウォーク・ホーム』が思い出されるが、20年以上を経た現在も、映画におけ

る歴史事象の扱われ方について研究者が同じような批判を展開しているという事実は、驚くには値しないことかもしれないが、やはり衝撃である。

映画に対する私個人の感想はというと、ABWHの声明文ほどではないにせよ、黒人女性の経験が白人女性の成長物語に利用されている点は、観ていて後味の悪いものだった。カリカチュア化された家政婦像には、なるほどABWHの批判も無理はないと納得しつつ、感動の涙にくれる周囲の観客との温度差を感じつつの鑑賞となった。たしかに「心温まる」物語ではある。しかし時代背景が1960年代前半のミシシッピ州となれば、やはり時代背景を的確に描き出してほしいところだ。H-NETの議論では、人種隔離時代の南部が舞台というだけで、所詮は小説というフィクションに基づいた映画なのだから、それほど目くじらを立てる必要はないのではないか、という意見もあった(おそらく一般の意見としてはこういった反応が一番多いだろう)。しかしこれらの文化的表象が我々の歴史・現状認識に与える影響の大きさを考えれば、少なくとも研究者には看過できない問題である。日本での公開がいつになるかは分からないが、評価が気になるところだ。

入 会 者

杉浦 清文(すぎうら きよふみ) 氏

所属：神戸大学(非常勤)

自己紹介：現在、神戸大学等で非常勤講師をしております。専門は英語圏ポストコロニアル文学・理論です。これまでは、ドミニカ出身の白人クレオール女性作家Jean Rhysの作品に着眼し、白人クレオールの複雑なアイデンティティについて研究を積み重ねてきました。また、ポストコロニアル理論の分野では、Hybridityの概念に着眼し、他者を「否定」(negation)してしまわずに、他者との「交渉」(negotiation)を志向する異種混濁性の可能性について思索してきました。今後は、カリブ海地域における言語・文化の異種混濁的な状況を、様々な観点から考察していければと考えています。何卒宜しくお願い致します。

退 会 者

船田 麻衣子 氏

会計からのお願い

2011年度会費6千円の未納の方は下記郵便振替まで至急お振込み下さい。

振替番号： 00910-6-148435

名義人： 黒人研究会

<編集> 黒人研究会・編集部

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

<編集者> 井上 怜美

-